

『猫と冬瓜とお葬式』

作
官
本
一

登場人物表

子供 C	子供 B	子供 A	京子 (51)	大将 (53)	和尚 (49)	三橋文江 (59)	三橋徹 (63)	川田加代子 (53)	市田佳子 (54)	脇田五郎 (27)	市田正夫 (54)	松田理沙 (11)	松田貴子 (33)	松田星児 (31)
			大将の妻	やきとん屋「とん平」の主人	近所の寺の住職	三橋の妻	佳子の実兄	市田の隣家の主婦	市田の妻	俳優仲間	俳優仲間	その娘	その妻	俳優志望の駄菓子屋店主

○夕焼けだんだん（朝）

谷中銀座を見下ろす階段。
出勤する勤め人や学生達が、日暮里駅へ
向かって、上がって行く。
ノラ猫達が、アチコチに置かれたエサ皿
に群がっている。

○松田商店・外（朝）

商店街の中の古い駄菓子屋。
シャツタ―は下りている。
家の裏手から、松田理沙（11）がラン
ドセル背負って出てくる。

理沙「おはよう！」

後から、シヨルダーバッグ持った松田星
児（31）が出てきて、

星児「理沙。忘れてるぞ」

星児、アルトリコーダーを差し出す。
理沙、ムツとした顔で引ったくり、さつ
さと歩き去る。

星児「その背に」ありがとうぐらい言えよ」

と、松田貴子（33）、出てきて、

貴子「星ちゃん、お昼代」

貴子、千円札一枚差し出す。

星児「悪イ：（と、受け取り）」

貴子「終わったら、電話ちょうだい？」

星児「うん。それより、昨夜、何かあった？」

貴子「何かかって？」

星児「理沙の奴、今朝から、妙に機嫌悪いぞ」

貴子「：ああ、大したことじゃないの。気に

しない。もう遅いよ。行つてらっしゃい」

星児「そう？　じゃ、ま、行つてくる：」

星児、慌てて駅方面へ駆け出す。

貴子、星児を見送って家に戻る。

○電車の中（朝）

星児、ドア前に立ち台本を捲っている。

小声でセリフを唱えている。

五郎の声「どしたんスカ？　元気ないな：」

市田の声「俺な：もう、やめるわ：」

○撮影所・控え室

椅子に座り、スマホゲーム機を手にした
星児と脇田五郎（27）が、横でじっと
俯く市田正夫（54）を振り返っている。
周りには、待機中のエキストラ達。

五郎「市田さん：」

市田「お前らは、若いからいいけどよ、俺、
考えたら、もう五十四だしな：」

星児「らしくないな。すまけいが脚光浴びた
の五十過ぎだって、市田さん、いつも：」
五郎「そう、そう。綾小路きみまろだって、
ブレイクしたの五十代だしよって：」

市田「：もう、ダメだよ」

星児「何か、あったんですか？」

と、ドアが開き、助監督が顔を出し、
助監督「じゃ、順番にメイク室入って下さい」
皆、席を立ち、ぞろぞろ出て行く。

○同・スタジオ

ゾンビ達が、たむろしている。

ゾンビメイクの星児、五郎、市田。

星児「他にいねえか、他に：」

五郎「他に：あ、徳川家康は？」

星児「家康！ そうだ、家康なんて、幕府開

いたの、還暦すぎてからですよ？」

市田「限界だよ。そやって遅咲きの有名人に

縫ってな、自分ごまかして生きんのは：」

言葉を失う星児、五郎。

助監督「じゃ、本番行きます、よーい：」

カチンコと同時に、主演俳優、走る。

ゾンビ達、次々、切り倒され、星児、五

郎、市田らも呻きもがき苦しむ。

○ 同・外

星児、五郎、市田、歩いてくる。

五郎「最近、こんな仕事ばっかだわ：」

星児「はい、今、現場終わりました。お疲れ

様です：（切られそうになり）あの、すい

ません：次の仕事とかって：ですよねえ：

いえ：でも、何でもやりますから、はい、

何かあったら：ぜひ、はい、どうも：」

星児「スマホ、切つてため息。

五郎「そろそろ、事務所、クビっスかねえ：」

星児「ありえるけど」まさか：」

市田「がいなので、星児、振り返る。

市田「俯いて、突っ立っている。

星児「：市田さん？」

五郎「久しぶりに、飲んで帰りますか？」

星児「奥さん、体調悪いんだから」

五郎「あ、そっか、じゃ、帰んなきゃね：」

市田「動かないんだ」

星児「は：？何がですか？」

市田「あいつ、朝、息してなくて：触ってみ

たら、冷たかった：」

星児「ええ：！」

五郎「それって、まさか：」

市田「何か、恐くて：そのまま、今日、この

現場に来ちまったんだけど：」

星児「救急車、呼ばなかったの！」

五郎「ダメですよ！何やってんの！」

星児「ちよ、とにかく、行きましよう！」

星児と五郎、市田を連れて走り出す。

○都営アパート・外（夕）

年季の入った集合団地。

○同・市田家・玄関（夕）

やつれた白い顔の市田佳子（54）と買

い物袋提げた川田加代子（60）。

加代子、佳子の持っているビニール袋に

ジャガイモや肉などを入れる。

佳子「ごめんね。買い物なんて頼んじやって」

加代子「いいのよ。体、無理しちゃダメよ？

はい。じゃ、これ、お釣りね。」

佳子「それ、とつといて」

加代子「いいわよ、そんなの」

佳子「悪いから。お駄賃に。」

加代子「嫌よ、水臭いへと、お釣り、佳子に

押し付け）じゃ、またね」

佳子「ごめんね？」

加代子、笑って出て行く。

○同・同・前（夕）

市田の部屋を出て、向かいの川田家の玄関のドアを開ける加代子。

そこへ、星児、五郎、市田がくる。

加代子、振り返り、市田に、

加代子「ああ、お帰んなさい。今ね、佳子さんに頼まれた買い物、渡したところ……」

星児達、顔を見合わせる。

加代子、笑顔で会釈して、部屋に入る。

○同・同・台所（夕）

お玉で味噌汁の味見する佳子。

星児達が、上がりこんでくる。

佳子「わあっ。何、黙って、いきなり……」

星児「：奥さん？」

佳子「どしたの、お化け見たような顔して？」

五郎「市田に生きてますよ？」

市田「生きてんのか……？」

佳子、何か気がつき、

佳子「ああ：そう、そうなのよ。死んだのよ、わたし、いっぺん（いたずらっぽく笑う）」

星児と五郎、怪訝な顔つき。

佳子「でも、この人残してくわけにいかないでしょ？　思わず、三途の川、泳いで戻ってきたちゃった（アツケラカンと）」

星児と五郎、顔を見合わせポカンと。

が、市田は、涙が込み上げてきて、

市田「佳子：よく、戻ってきてくれた！」

市田、佳子に抱きつく。

佳子「何よ、冗談よ（星児と五郎に苦笑し）」
呆氣にとられる星児と五郎。

○同・同・前（夕）

玄関から出てくる星児と五郎。

佳子と市田、顔を出し、

五郎「奥さん、人が悪いよ。咄嗟に、あんな

冗談、一瞬、信じそうになりましたよ：」

佳子「ごめんごめん。この人が、勝手に人の

こと殺しちゃうから、つい：

市田「頭搔き」いやあ、俺、てつきり：

星児「でも、間違いで何よりツスよ。じゃ：

佳子「理沙ちゃんと貴子さんにも、よろしく」

星児「はいへと、行きかける」

佳子「ねえ。頑張んなさいよ、あなた達：

星児と五郎、「？」と振り返る。

佳子「あなた達なら、大丈夫。必ずね：

星児と五郎、佳子の顔を見つめる。

笑顔で頷く佳子。

星児と五郎、曖昧にお辞儀し、去る。

佳子「見送り」あの子達、いい子達：

市田「ん？　：そうだな」

佳子「あんな息子、欲しかったね：

市田「：佳子」

佳子、市田を振り向き、

佳子「微笑み」ご飯、食べよつか。少し早い

けど。お腹すいてるでしょ？」

部屋の中に入る佳子と市田。

○同・外（夕）

歩いてくる星児と五郎。

五郎「奥さん、何で、あんなこと……」

星児「さあなあ……」

星児と五郎、歩いていく。

○小学校・校庭（夕）

ブラスバンドの音が響いてくる。

ランドセル背負った松田理沙(㊦)、音楽室を、羨ましげな顔で見上げる。

○スーパーの生鮮売り場（夕）

台車に積んだカット野菜のパックを、売り場に並べるパートの松田貴子(㊧)。

見切れ品の棚の四分の一カットの冬瓜を見つけ、手にとって、ぐるぐる回す。

貴子「大して痛んでないな。買って帰ろ……」

冬瓜を片手に、台車を押して、チャンバの中へ入っていく。

○日暮里駅・谷中方面出口（夕）

クマゼミの旺盛な鳴き声。

買い物袋提げた貴子が、人待ち顔で立っ

ている。買い物袋に冬瓜が見える。

貴子、手を大きく振る。

貴子「星ちゃん！」

改札から星児出てきて、袋を持つ。

星児「お。冬瓜か？」

貴子「ちょっと傷がついてるだけで、見切れ

品よ。アガるついでに、買っちゃった」

星児「じゃ、久しぶりに冬瓜スープ作るか」

貴子「よろしく。理沙も好きだから、あなた

の冬瓜スープ」

星児「正確には、祖母ちゃんの冬瓜スープね」

星児と貴子、歩き出す。

貴子「ねね。メール見たけど、市田さんの奥

さん生き返ったって、何？どゆこと？」

星児「いや、結局、市田さんの早とちりで……」

笑って喋りながら、歩く星児と貴子。

○夕焼けだんだん（夕）

夕焼けに染まる谷中の町並み。境界の野良猫達が集まってきた。彼らに牛乳を飲ませている星児と貴子。痩せた白猫が、群から弾き出されて啼いている。

星児「こいつ、いつもありつけないのな……」
貴子、他の猫をどけて、そこへ白猫を押し込んでやる。

星児「笑って～いいのか？ 甘やかして」
貴子「フフ：放つとけないの、こういうの」

貴子、フト、真顔になり、
貴子「でも、ちよつと、分るね、その話……」

星児「え？」
貴子「わたしも、そうなたら、三途の川、思いつきり、泳いで戻って来ちやうな……」

星児「縁起でもねえ。奥さんの冗談だよ」
貴子「冗談だつて：死に切れないよね。亭主の晴れ姿、見ないうちには……」

星児、思わず貴子の横顔を見つめる。

貴子、立ち上がる。

貴子「帰ろうか？」

二人、並んで、階段を下りていく。

○松田商店・外（夕）

チーンとリンが鳴る――。

○同・居間（夕）

星児、仏壇の前で合掌している。

優しそうな祖母の写真を見て、

星児「今日、冬瓜スープ。祖母ちゃん仕込の

アレだけは、貴子と理沙に評判いいから。

数少ない、親父の見せ場だ！」

祖母の写真の隣に、両親の写真。両親の

間にいるのは、幼い頃の星児。

星児、両親の写真に目を移す。

貴子、台所で、買ってきた物を冷蔵庫に

入れている。

貴子「お店、開けないの？」

星児「お。開けるよ。あいつら来る頃だ！」

星児、立ち上がり、店に下りる。

○同・外（夕）

シャツターが上がり、星児が出てくる。

アロハシャツの和尚(5)、通りかかり、

和尚「おう、星児」

星児「あ、和尚。また駅前の、ジュリちゃん」

和尚「あの娘はダメ。男いんだって。今日は、

とん平。何だい、今から、店？」

星児「昼間、撮影だったからね」

子供達が、「わあ」と走ってくる。

星児「子供達に」いらっしやい」

和尚「撮影って、何？　ポルノか？　ポルノ

だったら、誘えよ？」

星児「違うよ。今日は、コレ（手を垂らし）」

和尚「何、それ？」

星児「ゾンビ」

和尚「何でえ、気味悪いな。貴子ちゃんは？」

星児「中にいるよ？（中をこなす）」

店の奥の居間を覗く和尚。

流しで米を研いでいる貴子の尻を見つめ、
合掌する和尚。

和尚「良いなア、貴子ちゃん。特にお尻：」

星児「煩惱の固まりだな」

和尚「煩惱即菩提。貴子ちゃんに言っとけ。

売れない役者より、坊主のカミさんの方が、

贅沢できるぞって」

和尚、ガハハと笑って、去っていく。

星児「人のカミさんに色気出さなつつうの：」

子供Aの声「お願いしまあす！」

星児「ああ、はいはい：（子供達の方へ行き）

六十円と五十円、君は七十円ね：」

お金を出さない子供達。

星児「ん？」

子供A「おばちゃんがいい：」

子供B「おばちゃんがいい：」

子供C「おばちゃんがいい：」

星児「お前らもか：貴子？」

貴子「振り返り～ええ？」

星児「お前がいいんだとよ」

貴子「ああ。はいはい。どうも、ありがとう」
やってくる貴子。子供ら、嬉しそうに、
財布から小銭を取り出し始める。

貴子「冬瓜、出しといたよ」

星児「お、サンキュー」

星児、中に入る。

○同・居間く台所（夕）

居間と繋がった台所。

まな板の上に冬瓜が乗っている。

星児、包丁をつかんで冬瓜を切ろうとす

ると、玄関から理沙が帰ってくる。

理沙「暗く～ただいま」

貴子「振り返り～あ、おかえり。遅かったわ

ね。どっか寄ったの？」

理沙、無視して通りすぎる。

星児、居間を振り返り、

星児「理沙。今日、冬瓜スープにしようか」

理沙、星児とは目も合わさず、さっさと

階段あがって二階へ行く。

星児「何だよ。まだ、機嫌悪いのかよ……？」

貴子「お金を仕舞い」……全くもう」

貴子、立ち、二階へ上がっていく。

星児、気になり、二階を覗く。

○同・理沙の部屋（夕）

ランドセルを下ろす理沙。

廊下から貴子の声がする。

貴子の声「理沙。入るわよ？」

貴子、襖を開けて、入ってくる。

貴子に背を向けたまま動かない。

貴子「まだ、根に持ってるの？」

理沙、唇を突き出してフテている。

○同・二階の階段（夕）

そつと、階段を上がって来る星児。

○同・理沙の部屋（夕）

貴子「こないだ納得したじゃないの？」

理沙「……」

貴子「しょうがないでしょ？ 入部費も月謝も払えないし、それに楽器だって：そんな余裕ないんだから、うちには：」

理沙「お金ないなら、駄菓子屋なんかやめて、また大道具やればいいじゃん、お父さん：」

○同・二階の階段（夕）

星児「聞いていて：」

○同・理沙の部屋（夕）

貴子「それだと、自由に休めないから。お父さん、役者の仕事、何でもやりたいのよ」

理沙「役者たったって、脇役ばかりじゃん。脇役っていうか、チョイ役？ 一瞬だけ映って、すぐいなくなる」

貴子「：そうだけど」

理沙「無理だよ。あの年で売れなきゃ：」

貴子「そんなの：分らないでしょ？」

○同・二階の階段（夕）

星児、そっと下りようとして足滑らし、

星児「腰を打つ」アッ！」

○同・理沙の部屋（夕）

物音に振り返る貴子と理沙。

○同・二階の階段（夕）

襖開いて、貴子と理沙が顔を出す。

貴子「：大丈夫？」

星児「腰擦り」ああ：うん：ハハ：」

理沙と目が合う星児。

星児「理沙：お父さんがこの店やってんの、

自由に休めるからだけじゃないんだよ？」

理沙「：」

星児「曾祖母ちゃんが、この店なくなると、

子供達の楽しみが無くなるって、死ぬ前に

心配してたから、それでお父さん：」

理沙「それは何度も聞いたよ：」

星児「だったら：」

理沙「でも、わたしはどうなの？」

星児「え？」

理沙「曾祖母ちゃんの気持ちは分る。でも、わたしは、そのせいで、いっつもガマンしなくちゃいけないわけ？」

星児「：」

貴子「理沙：」

理沙「塾も水泳も、理由つけて、いっつもガ諦めさせられてる！」

星児も貴子も言葉がない。

理沙「自分ばかり、好きなことやってさ、親の責任、果たしてからにしてよ！」

星児「：！」

貴子「理沙：！」

理沙、自室に飛び込み、襖をピシヤリと閉める。

星児も貴子もそれを見つめるしかない。

○同・居間（夕）

階段を下りてくる星児と貴子。

星児「今度は、グラスバンドか：？」

貴子「そうなのよ……」

星児「どうして、言ってくれなかったの？」

貴子「だって……」

星児「言ったって、金が無いからか？」

貴子「……」

星児「あんまりズバリ言うなよ、子供に……」

貴子「いいかげん、テキトーな理屈じゃ、誤

魔化せないもの……」

星児「つつた……」

貴子「けど、実際、わたしのパート代だけじ

ゃ生活費だけで、精一杯だし（口噤み）

星児「……」

貴子「……ごめん」

星児「ため息をつき、台所に戻ると、包

丁を手にする。

と、スマホが鳴る。

星児「ズボンのポケットから取り出し、

星児「……市田さん？（出て）もしもし……」

店に下りかけた貴子、振り返る。

星児「……え、え？ 何で？ どうして！」

貴子「：？」

星児「待って。落ち着いて、市田さん、い、今すぐ、そっち行くから！」

星児、スマホを切り、

星児「市田さんの奥さんが、亡くなった！」

貴子「え！　また、早とちりじゃないの？」

星児「今度は、救急車呼んだって：そしたら、

そのまま病院で！」

貴子「そんな：へ口元を押さえこ」

星児「俺、ちよつと行つてくる」

星児、玄関の方へ走る。

貴子、シヨックを隠せない。

まな板の上に残された冬瓜――。

○病院の霊安室（夜）

顔に白い布被せられた佳子。

それを見つめる市田、星児、五郎。

星児、合掌して、布をめくる。

穏やかな顔で目を閉じている佳子。

五郎「何で？　つい、さつきでしょ：？」

星児「やりきれない目で」

市田「お前ら帰った後、いつも通り、晩飯食って、俺が下らねえ話して、あいつが笑って：いつもと何も変わらなかった：」

星児と五郎、佳子の顔を見つめている。

市田「：けどさ、何か知らねえけど、あいつ、突然ポツンとさ、ありがとう、なんて言いやがんだ」

星児「ありがとう：？」

市田「頷き」何がよって聞いたたら、何も答えねえで、ただ、ニコニコ笑ってやがってな：そしたら、途端にバタって：」

佳子の顔。

市田「今思うとよ：あいつ、もしかして、それだけ言う為に、戻ってきたんじゃねえかなあつて：」

五郎「戻ってきた：？」

市田「：俺に、ありがとうって言う為に、冗談じゃなく、本当に三途の川、泳いで戻ってきたちゃったんじゃねえかなって：」

星児と五郎、佳子を見つめている。

市田「：バカな奴だよ：俺みてえな男と一緒に
になったばかりに、楽しい思いなんかちつ
ともしねえで：俺ばっかり、好きなことや
ってよ：悪いことしたよ、俺は：」

星児と五郎、痛ましく市田を見つめる。

佳子の穏やかな顔――。

○松田商店・居間（夜）

野菜炒めをおかずに夕飯を食べている貴
子と理沙。

貴子「さつき、お父さんから連絡あつて、明
日、お通夜だから、理沙も一緒にね：」

理沙「：わたしも？」

貴子「可愛がってくれたでしょ？　お誕生日
にプレゼントももらったり。ちやんとお別れ
のご挨拶しないと」

理沙、フト、箸を止め、

理沙「いつか、お母さんも同じことになるよ。

市田さんの奥さんと：」

貴子「ちよつと、失礼よ、亡くなった人に！」

理沙「早いうち、別れちゃった方がいいよ」

貴子「理沙：！」

理沙「お母さん、モテんだし、今からでも、
も少しマトモな男見つかるって。見込みな
いじゃん、あんな奴：」

貴子、思わず、理沙の頬を打つ。

貴子「あんな奴はないでしょ、お父さんに！」

理沙「頬を押さえ」何ですよ！ 何で、あんな

奴が、お父さんのよ！」

理沙、立って、二階へ駆け上がる。

貴子「悔しく唇噛み締め」：」

○『とん平』・外（夜）

路地裏の小さなやきとん屋。

二人連れの客が、出てくる。

入れ違いに、肩落とした星児、来る。

○同・中（夜）

カウンターだけの店内。

串を回す大将（53）と客のコップや皿

を片付けている妻の京子（51）。

和尚が、飲んでいる。

京子「いらっしやい」

大将「よお、星ちゃん」

星児「生、ちようだい：」

星児、空いている席に座る。

京子「生ね。（サーバーへ）浮かない顔だね。

貴子ちゃんと、ケンカでもしたのかい？」

和尚「おつと、耳寄りだな。とうとう愛想尽

かされたか？」

大将「目輝かすんじゃねえ」

京子「一体、どうしたの？ お気楽星ちゃん

らしくないへと、ジョッキを星児の前にこ

星児「俺、そんなにお気楽に見える？」

和尚「お気楽じゃないの。妻子持ちの癖に、

フラフラフラフラしてて」

星児「和尚に言われたくねえよ。檀家の金で、

飲む打つ買うの道楽三昧じゃねえか」

大将「そら、そうだ」

和尚「やめろよ。人が聞いたら信用するよ」
笑いが起きる。

星児「ねえ、和尚。ちよつと、明日、お経上げに来てくれない？ 向島なんだけど」

和尚「向島？ 何で？」

星児「役者仲間の奥さんが亡くなってね……」

京子「あら……」

和尚「葬儀屋は、紹介してくれないのか？」

星児「なるべく金かけたくねえんだよ。葬式

も、簡単に通夜葬にするっていうし……」

和尚「通夜葬か。最近増えてるな。通夜と葬

式一緒にしちゃうの」

京子「へえ。そうなの、今？」

星児「で、だったら、俺、お布施に拘らない

徳の高い坊主、近所にいるよって……」

和尚「おい、それで、俺かよ？ 悪いけど、

お布施拘るよ？ 俺、プロだもん……」

星児「うちの事務所が出した、アイドルの水

着DVDBOX、欲しがってたろ？」

和尚「え？」

星児「アレで頼むよ。有難いところ一つさ」

和尚「：うーん、そう来たか」

星児「頼んだぜ」

大将「いくつだったの、その人：？」

星児「五十四：」

京子「まだ若い：旦那さんは？」

星児「同い年：」

大将「：身寄りには？子供いないの？」

星児「首を横に振り」奥さん、若い頃から心

臓弱くて、子供作れなかったって：」

しんみりとなる連中。

○同・外（夜）

京子、暖簾を仕舞いこむ。

○同・中（夜）

京子、暖簾を持って入ってくる。

皆、涙すすすっている。

大将「：三途の川から戻って来て、ありがと

うだア？ あんのかねえ、そんなこと：」

京子「あるかもしれないよ。いい夫婦には：」
星児「けど、何だか、身につまされてさア：」
大将「星ちゃん。お前さん、絶対、貴子ちゃん、そんな目に合わすんじゃないよ」
京子「本当だよ。しつかりしなよ？」
星児「分ってますよ。そんなこと：」
和尚「星児。俺、さつき、内心、竹にしところ
うと思つてただけどな：」
星児「は：？」
和尚「お経にも松竹梅があんだよ。でも、今の話聞いてな、ちゃんと松にするわ：」
星児「：そう。助かるよ、和尚」
京子「けど、星ちゃん、良いことしたよ。つましくていいから、葬式は出してやれって言つたんだろ？」
星児「俺のこと、実の息子みたいに可愛がつてくれたもんでね、その人：」
大将「そっか。星ちゃん、六つん時に、事故で両親亡くしてナア、それからずっと婆さんだけだったもんな：」

京子「実の親のつもりで、葬式出してやりた
いんだね。」

寂しい目で、酒を飲む星児。

○松田商店・居間（夜）

パソコンで家計簿つける貴子、ため息。
帰ってくる星児。

星児「ただいま」

貴子「ああ、お帰りなさい」

貴子「どう、市田さん？」

星児「手を洗い」うん。俺達帰る頃には、何
とか気持ち立て直してくれて。」

貴子「そう。」

星児「今夜、二人っきりで、今まで話せなか
ったことでも話そうかなって。」

貴子「：わたしも、生きてるうちに、奥さん
と、もう少し話しておきたかった」

星児「貴子の背を見つめている。」

星児、貴子を背中から抱きしめる。

貴子「：ちよ、どうしたの？」

星児「貴子：」

貴子「：」

星児「お前、後悔してないか：？」

貴子「：何を？」

星児、腕に力を込める。

貴子、そっと星児の腕を触り、

貴子「そっちこそ：こんな、野良猫みたいな

女、拾っちゃって、後悔してない：？」

星児、思い出す。

○回想・歩道橋の上（夜）

フラフラと歩く、お腹の大きな貴子。

やつれた顔に泣き腫らした目。

ふと、足を止め、下の道路を見下ろす。

汚れた格好で、ナグリやラチェットぶら

さげたガチ袋を腰にガチャガチャ言わせ、

階段を上がってくる星児。

貴子、欄干に身を乗り出す。

星児「気がつき〜っと、待った、待った！」

星児、走り出して、貴子を抱きとめる。

貴子「放せ！ 放せ、チクショウ！」

星児「落ち着けよ、あんた！」

貴子、急に腹を押さえ、うずくまる。

星児「：お、おい、どうした？」

○回想・病院・外観（夜）

救急車から下ろされるストレッチャーの
貴子。星児も飛び降り、病院の中へ入っ
ていく。腰のガチ袋が揺れる。

○回想・分娩準備室（夜）

苦しむ貴子に付き添う助産師と星児。
助産師、横たわる貴子の股に、後ろから
片手の拳を押し付けている。

助産師「どう？ 少しは楽になるでしょ？」

貴子、苦しげながらも頷く。

と、助産師の呼び出しベルが鳴る。

助産師「星児に「すいません。ちよつと、隣

のママさん、見てきますんで……」

星児「え……」

助産師「大丈夫、まだ、生まれないから」

星児「だけど……」

助産師「拳でね、臍の入り口ん所、グウツと

押してあげて」

星児「僕がですか？」

助産師「他に誰がいるの？　パパでしょ？」

星児「いや、僕は……」

助産師「しつかりしなさい！」

星児「は、はい……」

助産師、出て行ってしまふ。

星児、立ち尽くす。

貴子「苦しく……やって、早く！」

星児、意を決し、貴子に拳を宛がう。

星児「……ど、どうですか？」

貴子「もっと、強く押して！」

星児、目を白黒させて頑張る。

○回想・分娩室

助産師が、赤ん坊を持って来る。

助産師「頑張ったね。女の子。すごい美人よ」

貴子、分娩台の上で抱き取る。

複雑な表情で抱く貴子。

助産師、床にかがんで声をかける。

助産師「パパ。産まれましたよ」

貴子「：あもう：」

助産師「気にしないで、旦那さんだけじゃな

いから、こういうの。頭出てきた途端に、

気絶しちゃうのは：」

貴子「：」

星児、気絶している。

○回想・病室

ベッドの上の貴子と小さなカプセルに寝

かされた赤ん坊。理沙である。

それを笑顔で見ている星児。

貴子「：悪かったね。見ず知らずなのに、出

産まで立ち合わせちゃって：」

星児「俺もよく分んねえけど、行きがかりだ

しな：けど、ちよつとビビったわ：」

星児と貴子、小さく笑い、後は、気まず

く黙って理沙を見つめる。

星児「：でもよ、もう二度と、死のうなんて、
考えちゃダメだよ、あんた：」

貴子「：」

星児「何があったか知らねえけどさ：」

貴子「：」

星児「この子に、約束しろよ：」

貴子「：パパ、分ないんだよ、この子」

星児「：え？」

貴子「こんなバカなママじゃ可哀相じゃん：」

貴子、両手で顔を覆って泣きだす。

星児「：」

理沙が、むずがり出す。

星児、理沙をそっと抱き上げ、あやす。

貴子、顔を覆って嗚咽している。

○松田商店・居間（夜）

貴子を後ろから抱きしめている星児。

貴子「：あなたが、理沙の父親になるって言

い出した時、正直、バカなのかと思った：」

星児「それでも言わなきゃ：身寄りもねえつていうし。放つとけるか、普通：」

貴子「でも、あん時、スウツと、この人、信じちゃおうかって気になって：」

星児「：間違いだった？」

貴子「ううん。正解」

星児「：本当かな」

貴子「理沙だつて、あなたのこと本当の父親だと思ってるし、だからこそ、あんな風に

甘えられるのよ？」

星児「でも、いいのか、俺、このままで。

（パソコンの画面コナシ）真っ赤つかだ：」

貴子も、画面を見つめる。

貴子「自分に言い聞かせる風に、わたしとあの子は、あなたに命を助けてもらった：」

星児「：」

貴子「どんな暮らしだつて、一生、わたしは、あなたについていく：」

星児「：」

貴子「だから、あなたは、ぶれないで、夢を

叶えて……」

星児「……」

○同・理沙の部屋（夜）

布団の中で、眠れないでいる理沙。

○都営アパート・外（夕）

階段下に簡易テーブルを置いて、受付を
している星児と五郎。

記帳を済まして、入っていく弔問客。

五郎「思ったよりも、来るもんですね」

星児「人柄だな、奥さんの……」

しんみりする二人。

と、いきなり、放り投げられる香典袋。

星児と五郎、驚いて顔を上げる。

三橋徹（60）と妻、文江（59）。

文江「あなた、そげな不躰に……すみません

……亡くなった佳子の兄と嫁ですたい……」

星児「あ、宮崎の……この度は……」

三橋「ふん。こげな所で葬式がか……」

文江「あんだ：！」

五郎「恐る恐る」こちらに、お名前を：

筆ペンと芳名帳を差し出す。

三橋、乱暴にペンを取り名前を書く。

書き終え、三橋と文江、入っていく。

見ている星児と五郎。

五郎「市田さんから、聞いてたけど：」

星児「なかなかだぞ、ありや：」

喪服の貴子と理沙が来る。

貴子「星ちゃん、五郎ちゃん：」

星児「振り返り：よう」

五郎「どうも。こちらに、お名前：」

貴子、筆ペンで書き始める。

五郎「理沙ちゃん、久しぶりだね：」

理沙「死ぬまで貧乏って、どんな感じかな：」

つまる星児と五郎。

貴子「理沙っ」

貴子、そそくさと記帳し、星児と五郎に

軽く目を合せ、理沙と中へ入っていく。

五郎「苦笑い」キツイな、理沙ちゃん：」

理沙の背中を見つめる星児。
読経の声が聞こえてくる――。

○同・市田の部屋（夜）

簡素な祭壇の前で、読経する和尚。
その後ろに市田と三橋、文江の三人。
更に、その後ろに星児、貴子、理沙、五郎、加代子、他の弔問客ら。
十五人程が窮屈に、読経を聞いている。

○同・外（夜）

星児が和尚にDVD BOXを渡す。横に、
胡散臭げな顔の五郎もいる。

星児「はい。約束のブツ：」

和尚「合掌して受け取る。これはこれは：」

五郎「あんたのお経で、極楽往けんのかねえ」

和尚「心配いらん。生きてるうちに、報われ
なかつた者が往く為に、極楽があるのだ」

星児と五郎、詰まる。

和尚「では、これで：」

和尚、スクーターで帰っていく。

五郎「誰だって、生きてるうちに報われたい

スよ：」

星児「：戻ろうぜ」

星児と五郎、中へ戻っていく。

○同・川田家（夜）

二部屋をぶち抜いて、精進落としの部屋
になっている。寿司桶、酒、ビールが並
んでいる。

弔問客らが、近所者らしく打ち解けて話
しながら飲んでいる。

加代子ら主婦連が、お酌している。

それらとは浮いた感じで三橋と文江。

文江「箸くらいつけてやらんね：」

三橋「フン：なんじゃ、こげなモン」

三橋、コップの酒を一気に飲む。

少し離れた位置に、ビールの注がれたコ
ップを持って黙り込んでいる貴子。涙で
目と鼻が、酒で頬がほんのり赤い。

隣の理沙、貴子の小皿の寿司に箸がついていないのを見て、

理沙「：食べないの？」

答えず、ビールをグツと飲み干す。

理沙「少し意外で」：？」

と、加代子が、ビール瓶差出し、

加代子「もう、一杯、いかりますか：？」

貴子「あ：次、日本酒で」

理沙「お母さん、お酒好きだったの？」

貴子「酒瓶に手を伸ばし、久しぶりよ」

加代子「お注ぎしますへと、取り上げ」

貴子「あ、すみません」

加代子「コップ、いいんですか、それで？」

貴子「はい：どうも」

貴子、頭を下げ、注いでもらう。

加代子「あの、あなた、よく市田さんここに

見えてる、お若い方の：？」

貴子「頷き」松田といいます」

貴子、酒を一気に飲み干す。

加代子「：大丈夫？」

貴子「息をつき」悔しいだろうな、奥さん」

加代子「悔しい？」

貴子「旦那さんの、晴れ姿見る前に：」

理沙、貴子の顔を見つめる。

加代子「そうねえ：でも、そんなに不幸じゃ

なかったんじゃないかな：」

貴子「え：？」

加代子「だって、市田さんの奥さんから、愚

痴なんて一度も聞いたことなかったもの：」

貴子「：」

加代子「奥さん、よく言ってた。わたしが、

あの人支えてるんじゃない。あの人が、わ

たしを支えられてるんだって」

貴子「奥さん、そんな風に：？」

貴子、考え、ふっと顔が和む。

貴子「：そっか。そうだったのかもしれない

ですね：」

理沙、貴子を見つめる。

突然、三橋が、文江に怒鳴る。

三橋「しやあしい！お前になんが分る！

佳子は、親も早う死んで、俺が親代わりになつて育てた、たった一人の妹でえ！」

皆、三橋を見つめる。

貴子「三橋を見つめる」：

入り口の所で、星児と五郎も見ている。

星児、五郎を促して出て行く。

○同・市田の部屋（夜）

市田、穏やかに遺影を見つめている。

入ってくる星児と五郎。

星児「お義兄さん、ずいぶん荒れてますよ！」

市田「反対押し切つて、結婚したからね！」

五郎「大丈夫ですか？ 何か、揉めそうです

よ、あの調子じゃ！」

市田「笑つて」お前らが気にするなつて。

（時計見て）さて、お隣も迷惑だろう。そ

ろそろお開きにしよう！」

市田、立ち上がる。

星児と五郎も後に続く。

○同・加代子の部屋（夜）

星児 入ってくる。

星児 「失礼いたします。ええ、只今より、喪主様から、ご会葬者様へのお礼のご挨拶を賜りたいと存じます：（と、場所を開け）

市田 が出る。

市田 「：本日は、お忙しい所、わざわざ足をお運びくださり、まことにありがとうございますと
いしました。故人もさぞや喜んでいることと
思います。生前、葬式はいらなと言つて
おりました。故人を親しく思つて下さる
方々が、それではあまりにも寂しいとい
うことで、様々、ご尽力下さり、このよ
うな形で、甚だ簡単ではございますが、
通夜葬を営むことができました。故人に
代わつて、皆様に心より、感謝申し上げ
ます。本当に、ありがとうございます。」「
三橋、いきなり立ち上がると、
三橋 「何が感謝じゃ。こんなちつぽけな葬式
しか出してやれんでよ！」

文江「慌てて」あ、あんた……！」

市田「……」

三橋「わしが言った通りじゃ。お前なんかと一緒になったら、苦労させられるばっかじゃちよ。もっとマトモな男と一緒になりや、何不自由ない人生送れたもんを、あんバカは！ 佳子は、お前に、人生食い潰されたつとじゃ！ 佳子を返せ！」

三橋、市田に掴みかかる。

間に入るご星児。

星児「あ、ちよつと、待った……！」

星児、ぶっ飛ばされて膳が散らかる。

五郎「星児さん！（慌てて起こしに行く）」

市田「も、動く」星ちゃん！」

が、転ばされ、三橋に締め上げられる。

三橋「返せ！ 返さんか、コラ！」

貴子、グウつと酒を飲み干すと、フラリと立ち上がる。

理沙「えっ……！」

貴子「市田さんの奥さんは、好きな人信じて、

命賭けて生き切ったんですよオ！」

皆、驚いて、貴子を振り返る。

星児「た、貴子……？」

貴子「奥さんは、市田さんとの暮らしを、二人で過ごした人生を、全部、全部、全部、全部受け入れてたんだと思いますけど！」

三橋「何じゃ、あんたは……！」

星児「貴子を見つめ……」

貴子「それの一体何処が不幸なんですか！」

何不自由ない生活しなきゃ、人間不幸なんですか！　そんな考え方しかできない人の方が、よっぽど不幸じゃないですか！」

理沙「貴子を見つめ……」

場は、静まり帰っている。

目が据わって、しゃっくりをする貴子。

星児、貴子の腕を掴み、

星児「……貴子。お前、日本酒飲んだのか？」

貴子、急に我に返り、バッグを持ち、

貴子「すいません、わたし……失礼します！」

貴子、そそくさと出て行く。

星児「貴子：！」

理沙も慌てて、後を追って出て行く。

星児「市田に」すいません：」

市田、微笑み、顔を横に振り、

市田「今日はもういいよ。一緒に帰りな」

星児「でも、後片付けとか：」

市田「みんないるから」

五郎も頷く。

星児「すいません。(三橋にも)すいません」

星児、駆け出していく。

皆、呆然としている。

三橋は、齒噛みして立ち尽くしている。

文江「あたしも、今の人の言う通りじゃち思

うよ？ たった一人の兄さんが、そう思う

てあげにや、それこそ佳子ちゃん、可哀想

じゃ思わんの？」

三橋の口から嗚咽が漏れる。

市田、ただ三橋に頭を下げる。

○同・外（夜）

しやつくりしながら来る貴子と理沙。

追いかけてくる星児、並んで歩く。

貴子「：やばい、やっちゃった、わたし：」

星児「：」

星児、貴子の肩に腕を回す。

二人、肩寄せ合って歩いていく。

理沙、立ち止まり、二人を見つめる。

星児、止まって、振り返る。

星児「どうした：？」

理沙、俯いて歩き出し、星児と貴子をす

り抜けて、一人、歩いていく。

その背を見つめる星児。

○松田商店・外観（夜）

部屋の明かりがついている。

○同・風呂場（夜）

湯船の星児、何かを決める顔になる。

○同・夫婦の部屋（夜）

着替えた貴子が喪服を仕舞っている。

襖が、開いて、理沙が立つ。

貴子「振り返り〜？？」

理沙「お母さん？」

貴子「何？」

理沙、入ってきて俯いている。

貴子「どうしたの？」

理沙「？」

貴子「？」

理沙「あんなお母さん、初めて見た！」

貴子「：ごめんね、恥ずかしかったね。もう、

ああいうこと、しないから！」

理沙「でも、お母さんの気持ちは少しだけ！」

貴子「え？？」

理沙、俯いている

見つめる貴子。

星児の声「階下から」風呂上がったぞ！ 次、

どっち入るんだ？」

貴子「理沙、入る？」

理沙、ちよこんと頷き、出て行く。

貴子、フト、笑顔になる。

○同・居間（夜）

風呂上りの星児、開けた戸袋の下で、古いガチ袋を手にして見ている。階段を下りてくる理沙、星児と、手にしたガチ袋を見る。

星児「あ、理沙、これな！」

理沙、顔を背け、風呂場へ行く。

星児「！」

ため息をつき、仏壇の前に座ると、

星児「祖母ちゃん死んで、この店継いで三年

：祖母ちゃんよ、悪いけどよ！」

写真の中の祖母の笑顔。

○同・脱衣所（夜）

服を脱ぎかける理沙、

理沙「何かひっかかり——」

振り返る。

○同・夫婦の部屋（夜）

貴子に耳掃除してもらっている星児。

星児「小さく」イテ：「

貴子「動かないで。いるのよ、大っきいの：」

星児「：例の、グラスバンドのことな」

貴子「：何？」

星児「やらせてやろうと思うんだ」

貴子「やらせるって、お金は？」

星児「大道具、また、戻るわ：」

貴子「役者の仕事、辞めるってこと？」

星児「：いや、辞めやしない。確かに、今ま

でみたいに、何でも引き受けるってわけに

は行かないけどさ：「

貴子「でも、じゃあ、お店は：？」

星児「仕方ないけど、しばらく閉めるよ。さ

つき、祖母ちゃんに頼んだ：「

貴子「悲しむんじゃない、お祖母ちゃん：」

星児「いや、何で、もっと早く気づかなかつ

たって叱られた：「

貴子「え：？」

星児「今まで、店を理由に、楽しんできたろつて。貴子に甘えてたろつて。貴子だけじゃない。理沙にも：」

貴子「：」

星児「夢は捨てない。けど、だったら、親の責任も果たさなきゃな。どっちもやらなきゃつて、そう叱られた：」

貴子、フツと微笑み、

貴子「取れた。見て、これ。こんなの！」

貴子、耳かきを見せ、星児も驚く。

○同・部屋の外（夜）

脱ぎかけの理沙、立ち聞きしていて、

理沙「少しジンと来てしまうー」

そつと、階段を下りていく。

○火葬場の煙突

煙が空へ吸い込まれていく。

○道

白木の箱を抱えて歩いてくる喪服の市田、
星児、五郎。

市田「貴子ちゃんに、礼、言っといってくれな」

星児「え？　だって、昨日は？」

市田「あの後、義兄さん、一晩中、一緒に酒

飲んでくれてな。何にもしやべんなかった

けど、酒注いでくれた：初めてだった：」

星児「そうですか？」

市田「お前らのおかげで、いい葬式できた。

ありがとうございます！」

星児、五郎、市田、歩いていく。

○都営アパート・市田家

遺影を見つめる市田、星児、五郎。

五郎「気持ち分るけど、何も辞めること：」

市田「いや、俺の夢は、こいつと二人で見て

きた夢だから：」

星児と五郎、市田を見つめる。

市田「昨日の晩、ここで、あいつと二人っ

きりで話したのさ。そしたら、あいつが、

言つてくれたのよ。もう、いいよつて。あなたは、もう充分戦つた。それをわたしは、ずっと観てきたからねつて：」

星児「：」

市田「それ聞いてね、何か俺、スウツと憑き物が取れたみてえにさ、楽なつたよね：」

星児と五郎、何も言えない。

市田「いい潮時をくれたんだ、佳子が：」

○道

歩いてくる星児と五郎。

五郎、ふと立ち止まる。

星児「振り向き」どうした：？」

五郎「：恐いっス」

星児「：？」

五郎「貴子さんは、昨夜、ああ言つたけど、俺は、あんな風に肯定できないス：」

星児「五郎：」

五郎「星児さんは、平気ですか？ 貴子さん

や、理沙ちゃん、ずっと苦労かけんスカ？」

星児「：」

五郎「市田さんの人生で何なんスカね？ 俺

達も、いつか、ああなるんじゃないスカ？」

星児「だったら、何だよ？」

五郎「え：？」

星児「市田さんは、後悔してねえだろ。あの

人なりに、やれることやったんだ。だから、

ああして諦めることもできんだ」

五郎「：」

星児「この世で報われようと報われまいとよ、

何か一つ、やり切ったことのねえ奴が、本

当の負け犬なんじゃねえのか？」

星児と五郎、見合う。

星児「そら、普通はみんな、市田さんみたい

な人笑うだろうけど、俺は笑わねえよ」

星児、五郎を振り切り、歩き去る。

五郎「星児さん：」

五郎、星児の背中を見つめる。

○夕焼けだんだん

星児来て、喪服のネクタイを解く。
近所の人が置いていったエサに野良猫達
が集まっている。
猫達を見つめる星児。
白猫が、今日も、他の猫達の下をくぐる
うとするが、弾かれる。
星児「今日は、助けてもらえねえぞ！」
それでも、割り込もうとする白猫。
星児「じっと見ている」：
ついに、他の猫を押し出す。
星児「：！」
夢中でエサに食いつく白猫。
星児「お前も、やればできんじゃんよ！」
貴子の声「星ちゃん！」
振り返ると、貴子が駆けて来る。
貴子「大変！　今、先生から、電話来て！」
星児「理沙に、何かあったのた？」
貴子「男の子とケンカして、階段から落ちた
って」
星児「えええ！」

○ 小学校・外観

駆け込んでいく星児と貴子。

○ 同・職員室

担任教師と理沙、星児、貴子。理沙の顔には、ひっかき傷。

担任「まあ、頭にタンコブできたくらいで済んだんで、良かったですけど……」

貴子「一体、どうしてケンカなんかしたの？」

理沙、俯いて答えない。

担任「相手の子が言うには、松田が、いきなり体を小突いたって言うんですけど、松田は、何も言ってくれなくて……」

貴子「どうして言わないの？ 本当に、あなたが先に手出したの？」

理沙、唇を歪める。

星児「：何か、あったんだろ？」

理沙、ぼそりと何か言う。

貴子「はつきり言いなさい」

理沙「息を吸い、吐き出すように」お父さん

のこと、バカにしたからだよ！」

星児と貴子、虚を突かれる。

理沙「あいつが、お父さんのこと、パンチラ

役者って言ったんだよ！」

貴子「パンチラ役者？」

理沙「一瞬しか見えないから」

星児「上手いこと言うなあ！」

理沙「感心しないでよ！お父さんバカにさ

れたんだよ！黙ってらんないよ！」

星児と貴子、胸を打たれる。

担任「松田、それで喧嘩になったのか？」

理沙、頷くと、一気に涙が溢れ出す。

星児「：そうか：そうか：」

星児、理沙の頭を抱きしめる。

○夕焼けだんだん（夕）

歩いてくる星児、貴子、理沙。

星児「ありがとうな！」

理沙「：？」

星児「でも、もう、あんなことで喧嘩するな。

言いたい奴には、言わせとけ」

貴子「星児を見つめ」：

理沙、小さく頷く。

星児「父さん、役者の仕事、好きなんだ。パ
ンチラくらいしか映んなくてもな」：

理沙「：」

星児「だから、悪いけど、諦めねえ」：

貴子「：」

星児「でも、その代わり、理沙のことも、ち
やんとする」

理沙「：」

星児「ブラスバンド、やってみたいならやり
なさい」

理沙「：」

星児「他にも、やりたいことできたら、ちや
んと言いなさい」

理沙「お父さん」：

星児「できるだけ、応えられるようにする」

理沙、そつと星児の手を取る。

貴子も、理沙のもう一方の手を掴み、星

児を笑みで見つめる。

星児「も、笑み返し」：

貴子「：行こっか」

階段を下り始める親子。

理沙「空見上げ」あ、今日、三日月だ」

空に白い三日月。

星児「：あ、冬瓜思い出した」

貴子「あ、あれ、早く使わないと」

星児「よし、今夜こそ作るか。冬瓜スープ」

理沙「うん！」

笑顔で階段を下りて行く親子三人。

夕陽が、谷中を染めている。

（終わり）